

奈良の仏教寺院

— 南都の寺の建築 —

32期生

I 研究方法

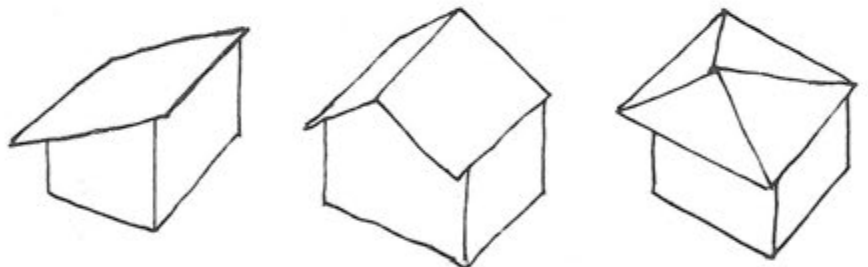
南都の寺というのは主に南都七大寺（法隆寺・東大寺・薬師寺・興福寺・唐招提寺・大安寺・西大寺）の中から、選ぶことにし、本や写真やその他のいろいろな資料を見て、ある程度の知識は、身につけておく。その後で実際に選んだ寺を1つ1つまわってみて、家に帰ってからもう一度本や写真や資料をみて自分の目で見てきたことと、照らしあわせてみる。それが終われば最後に他の寺のことも参考に入れて、今まで研究してきたことをまとめる。念のために、まわった寺は全部書き抜いておく。

法隆寺、東大寺、薬師寺、興福寺、唐招提寺、西大寺、法華寺、法起寺、法輪寺、菅原寺、新薬師寺、中宮寺、白豪寺他

II 研究結果

結果を、よりわかりやすくするために参考として建築用語、細部説明を先にすることにする。

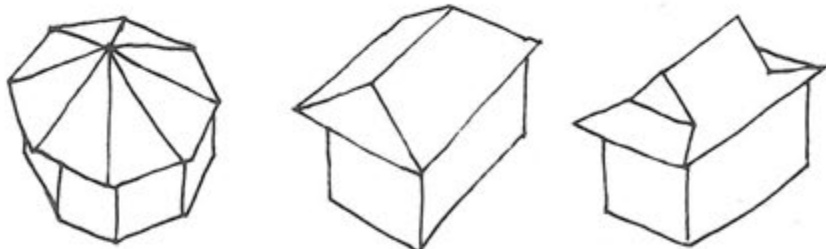
[1] 屋根の種類



片流れ (かたながれ)

切妻造 (きりつまづくり)

宝形造 (ほうぎょうづくり)



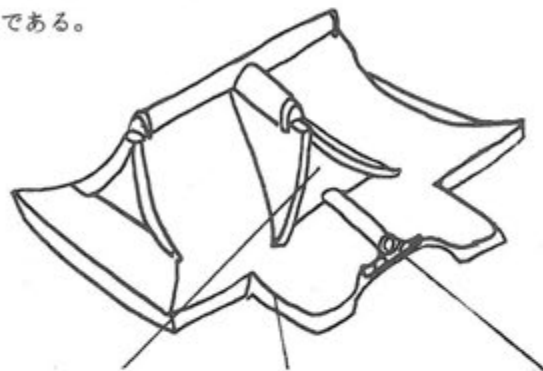
宝形造または八注造
はつちゅうぞう

寄棟造 (よせむねづくり)

入母屋造 (いりもやづくり)

[2] 破風

破風というのは、屋根の中ほどで屋根がもり上がったり、つき出したりしたような形になったものをいう。これは神社建築や城郭建築にもよく見られる。これも、寺院建築と同目的のために作られてある。その目的とは中から外がよく見られるようにということである。



千鳥破風
(ちどりはふう)

縫破風
(すがるはふう)

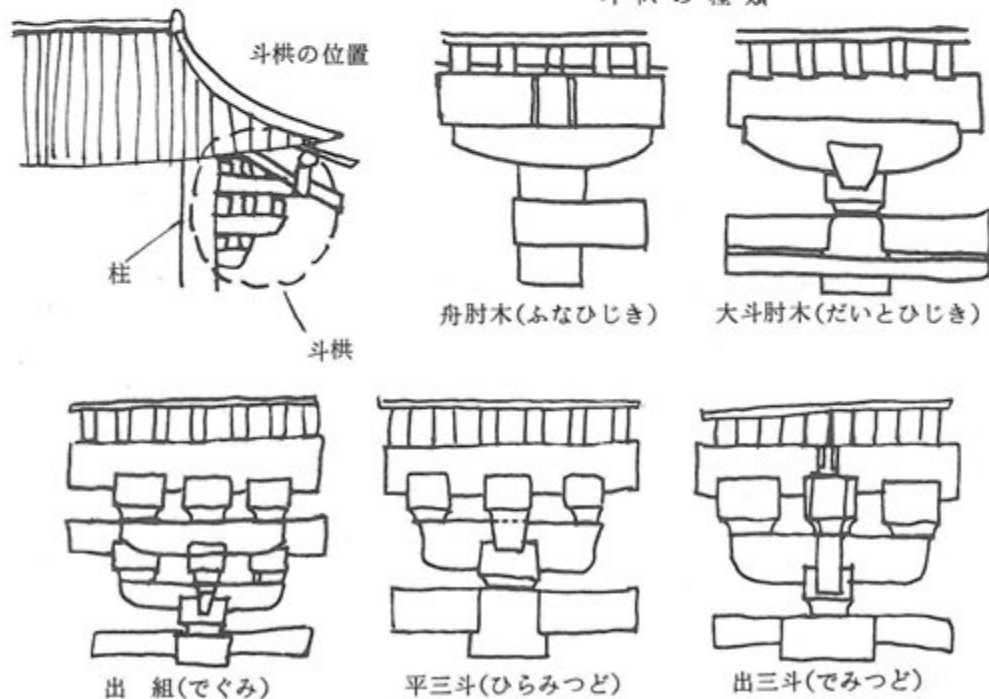
唐破風
(からはふう)

左図に示した以外では、入母屋破風、切妻破風などがあり、これらは2つとも現在の一般家屋の建築にまで伝わっている。又、破風がはじめて作られたのは鎌倉時代であるという説がある。

[3] 斗拱 (斗組・組手)

斗拱^{トウカウ}というのは、寺院建築では一番重要といってもさしつかえないほど独特なものである。これは斗組とも組手とも呼ばれ、柱からさまざまに組まれて上からの力(屋根)を一番効率よく支えるようにしたものである。また、これは形が複雑になっているためか装飾にも用いられる。

斗拱の種類



斗拱の位置

柱

斗拱

舟肘木(ふなひじき)

大斗肘木(だいとひじき)

出組(でぐみ)

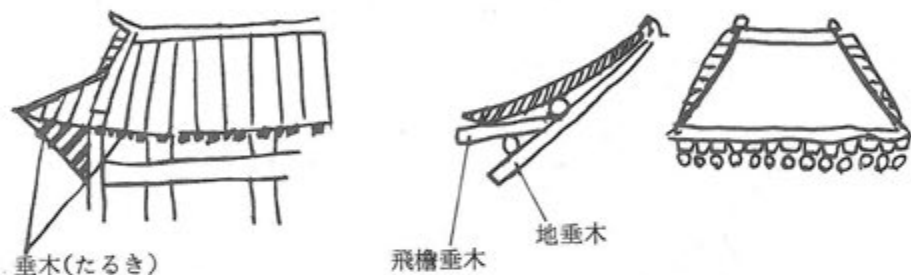
平三斗(ひらみつど)

出三斗(でみつど)

前ページの絵は、主な斗拱の絵をかいたつもりだけれど、これはあまりうまくないのではっきりわからないと思う。これは主なものだが、これ以外で主なものを挙げると三手先や六手先などがある。

[4] 垂木

垂木たるときというのは、屋根の上から下までかけわたされた柱のことで屋根をのせるという役目をする。これは、日本の現在木造建築にもかかさずみられる。それは、垂木というのは屋根があるかぎりなくすことのできないものだからである。寺院建築の方では一つ大きな特色がある。それは、特に奈良時代できた寺の垂木は、下図のように2つにわかれて上の四角い方を地垂木ちたるときといい、下の丸い方を飛橋垂木とびはしたるときという。



☆結果は、いろいろとあったが、よりわかりやすくするため表にまとめてみた。今までのことを参考にしてみるとよくわかる。

	法隆寺	薬師寺	東大寺	唐招提寺	興福寺
建立された時代	飛鳥時代	奈良時代 (白鳳)	奈良時代 (天平)	奈良時代 (天平)	奈良時代
宗派	聖徳宗	法相宗	華嚴宗	律宗	法相宗
金堂の建築について	 重層入母屋造り裳階付出三斗斗拱垂木は地垂木だけ、柱はエンタシス 世界最古の木造建築	 重層入母屋造り各層裳階付平三斗斗拱垂木は両方も付いている。	 一層寄棟造り裳階付、六手先斗拱天竺様式(大仏様式)世界最大の木造建築。垂木は地垂木だけ(たてなおし)正面中央に唐破風あり。宋の影響	 一層寄棟造り、垂木は両方も付いている。外観なんとなく東大寺金堂(大仏殿)とにている。唐の影響	

塔の建築について	 五重ノ塔裳階付上になるほど小さくなる	 三重ノ塔各層裳階付上になるほど小さくなる	 七重ノ塔上になるほど小さくなる	 五重ノ塔上も下も大きさは同じ
南大門の建築について	 重層入母屋造り	 一層切妻造り	 重層入母屋造り	
その他の建築について	夢殿八注造り		三月堂寄棟造り	

III 結論

結論としては、奈良の南都の寺院建築は、表をみてわかるとおりに建立された時代やその寺院の信仰する宗派や当時仏教国であった唐や宋などの建築の影響を受けて、その形や様式がいろいろにかわった。そのかわり方というのは、結果の表のようなことでそれによって分類することができたということである。今は、まだこれだけで中途だけれども、それは研究も中途だからだ。

IV 総括

結論の最後でも研究が中途だと書いたが、本当にその通りである。なぜなら、ぼくが最初にわからないと思ひ研究してそれを解明しようとした事から(結論)とは少しピント外れの結論がでたからだ。それは、やはりわからなかったからだと思う。ぼくの追いかけていた結論というのは、寺院建築はなぜ寺々によってちがって美術とはどういつながりがあるかということだからどう考えてもピント外れだ。しかし、他の人も同じことだろうけれど自分が研究したことについての知識は、自分の頭の中にちゃんと残っている。ぼくはこれだけでも意義のあることだと思う。千里の道も一歩からというように研究にも最初は絶対にあるのだから、たとえ一歩でも進歩できたと思ひ自分では思っている。

○参考文献

六大寺大観
奈良の寺 全二十一冊 岩波書店
文化財のはなし 奈良県教育委員会
奈良の寺院と天平彫刻 浅野清・毛利久著 小学館

古寺巡礼 淡交社
日本の建築 綜芸舎